

なぜオスカーは
おもしろいのか？

受賞予想で100倍楽しむ
「アカデミー賞」

メラニー

判太鼓・スー・ジョンズ

(コラムニスト)

！ショー・メント・エンターテインメントの極上

アカデミー賞に
興じる鍵は、

受賞予想にあった！

「最も優れた作品が
受賞するとは限らない」と
彼女に教えてもらった衝撃は、
いまだ忘れられません！

映画会社23年間勤務の著者が
惜しみなく披露する、アカデミー賞受賞予想メソッド！

なぜオスカーはおもしろいのか？

受賞予想で100倍楽しむ「アカデミー賞」

メラニー

星海社

159



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

オスカー予想屋、メラニーです

こんにちは。三度の飯よりアカデミー賞好き、「オスカー予想屋」のメラニーと申します。普段は映画会社に勤める会社員です。

アカデミー賞とは、アメリカで年に1回開催される、映画界でもっとも華やかな祭典。オスカーとは、そこで受賞者に授与される像のことです。金色に輝く人物が胸の前に両手をそえている、あの像。現在では、アカデミー賞自体を意味する愛称としても使われています。

私のオスカー鑑賞歴は高校生だった約30年前、第62回（1989年度）に遡り、約20年前からは、映画好きの友人と趣味で「受賞予想」を行っています。

的中率は、2017年度（第90回／2018年3月発表）が24部門中21部門、2018年度（第91回／2019年2月発表）が24部門中15部門でした。21部門は出来すぎ、15部門は平均的な成績です。

各年の成績については詳細記録もしてないし覚えてもいませんが、目安として18部門を超えたら上出来、12〜13部門だと読み違えた年、という感じ。良い年悪い年、どちらも経験があります。

現在のアカデミー賞は毎年2月に発表されますが、アカデミー賞の結果を大きく左右する「前哨戦」たるさまざまな映画賞は、前年の12月頃から続々と発表されます。私はその時期になるとソワソワがとまりません。というより、各映画会社が「アカデミー賞狙い作品」を続々と投入してくる夏の終盤くらいから、私のウォームアップは始まります。つまり私にとってアカデミー賞は、2月だけの行事ではなく、1年の半分くらいをかけて楽しむ祭典なのです。

3年ほど前からは、その狂ったようなアカデミー賞熱と独自に体系化された予想理論（笑）が、高校時代からの親友（悪友との説も）であるコラムニストのジェーン・スーさん（普段は「△△ちゃん」と本名で呼んでいます）の目に留まり、彼女の手引きでラジオにも呼んでもらえるようになりました。そこでは「市井のアカデミー賞マニア」「アカデミー賞予想がライフワーク」などと紹介されています。

アカデミー賞は紅白歌合戦？

アカデミー賞は唯一無二、世界最高峰の映画の祭典です。

世界には星の数ほどの映画祭があり、その規模や質は正直ピンキリです。有名どころとしてはカンヌ国際映画祭やベネチア国際映画祭などが知られていますが、アカデミー賞とは根本的に成り立ちが違います。

映画祭での賞は、各映画祭で上映された作品に与えられますが、アカデミー賞は前年に全米公開されたすべての（とはいえ細かい資格があります／第1章で後述）作品が対象となるからです。受賞作品に関わった俳優やスタッフのその後のギャラは跳ね上がり、一生のキャリアに「オスカー受賞者」のハクがつく。映画史に名を刻まれるのです。

日本で言うなら、昭和の時代の紅白歌合戦とでも言いましょうか。歌番組は数あれど、紅白に出られる歌手は別格の存在でしたよね。芸能界においては「紅白歌手」というだけでステータスが段違いでしたし、紅白に出ることを夢に地方から上京してきた演歌歌手が、舞台上で感極まるシーンもよく見られました。アカデミー賞の授賞式では、そんな感動的な光景が毎年のように繰り広げられます。

なにより、アカデミー賞には「超一流」の作品だけが集まります。

映画界を高校野球にたとえるなら、アカデミー賞のノミネート作品は甲子園出場校みたいなものです。その中で強弱はあるにせよ、そもそも「甲子園の土を踏める」というだけで、相当強いチームです。

同じように、アカデミー賞のノミネート作品に「駄作」はありません。個人的な好き嫌いはあっても、たいていどの作品を観てもよくできているし、観て損はしない。文字通り、粒ぞろいなのです。

無論、授賞式に集まっている人たちも超一流です。すさまじい傑作をつくりあげた俳優・監督・プロデューサー・多くのスタッフ。そんな、ものすごい才能をもった人たちが、きらびやかな舞台で一堂に会する場合は、アカデミー賞授賞式において他にありません。

本来スクリーンの中の演技しか見られない超一流たちの「生の姿」が見られるのも、授賞式の醍醐味です。「あの女優、貧相な役ばかり演じているけど、ドレスを着るとすごく品があるんだ」「あの俳優、映画では道化役が多いけど、自分の言葉でしゃべると意外に頭いいんだ」「怖い役者かと思ったら、本物はめっちゃ優しそう」。授賞式はそんな驚きと発見であつという間に時間が過ぎていきます。

しかも、そんな超一流の彼ら・彼女らですら、世界一の大舞台ではものすごく緊張する。これも見ものです。

たとえば、ダスティン・ホフマンは『レインマン』(88)で第61回アカデミー賞の主演男優賞を獲っていますが、受賞スピーチで様々なスタッフの名前を挙げて感謝を表した際、共演者トム・クルーズには触れませんでした。ほとんどW主演と言ってもいいほどの名演を見せたトムなのに……。舞台裏で、「トムを忘れてしまった!」と慌てていたそうです。この時のダスティン・ホフマン、驚くくらいにたどたどしいスピーチなのですが、『クレイマー、クレイマー』(79)で初受賞した時のスピーチは、オスカー史に残るような名スピーチだったので、心の準備ができていないだけでこうも違うのか、と印象的でした。

また第91回では、『アリー／スター誕生』(18)が歌曲賞を受賞し、主演のレディー・ガガが素晴らしい主題歌のパフォーマンスを見せましたが、同時に緊張も伝わってきました。

第63回の歌曲賞を獲った『ディック・トレイシー』(90)でマドンナが歌った時も、手袋を外して踊るシーンで手が震えていました。天下のマドンナが震えるなんて……と、当時高校生だった私も震えたことを覚えています。

アカデミー賞は、「才能のある、素晴らしい人たち」しか行けない場所。アカデミー賞授賞式当日、ロサンゼルスドルビー・シアターはトップ・オブ・トップの選ばれし人間だけで埋め尽くされます。そのキラキラするような饗宴を、4時間もずっと見ていられるのは、私にとっては至福ではありません。

4時間もやってるのかって？ やっているのです。

現在のアカデミー賞は24部門もあるので、みなさんよくご存じの「作品賞」「監督賞」「主演男優賞」といった主要賞以外に、「録音賞」「編集賞」といったイマイチ注目を浴びない賞もすべて中継されています。それらの賞を飛ばして主要賞だけを見たり、夜のダイジェスト版だけをチェックしたりする方もいらつしやいますが、私は絶対に、頭から終わりまで漏れなく、WOWOWの生中継で見ます。

レッドカーペット、オープニングの楽曲パフォーマンス、司会者のスピーチ、プレゼンターの細かいジョークまで、一挙一動、一言たりとも聞き逃しません。アカデミー賞には捨てるところがないのです！

なぜ予想できるのか？

私のアカデミー賞予想のルールは、「誰にでも得られる情報だけをもとに予想する」です。映画会社勤務という時点で、なにか特別な情報ルートがあるのではないか、と思われるかもしれませんが。でもそんなことは一切ないのです。

確かに最近、私の知り合いの中にも、アカデミー協会員になる人が一人、二人出てきました。ただ、協会の知り合いがいたとしても、投票を集計している会社と秘密裏につながってでもない限り、インサイダー情報は得られません。仮につながっていたとしても、極東の単なるアカデミー賞マニアに漏らすわけではないのですが。

「誰にでも得られる情報」というのは、以下のようなものです。

- アカデミー賞の前哨戦となる、その年の別の映画賞の受賞結果
- アカデミー賞の過去の受賞傾向
- ノミネートから投票日までのアメリカ国内の社会情勢
- ノミネートから投票日までに出る、ショウビズ専門記者や事情通ライターによる現地記事（英文）

etc.

これらを、アカデミー賞の特性から導き出した独自の予想ルールに当てはめて予想するのです。

アカデミー賞の特性を考えるうえで基本となるのが、「投票するのは観客や評論家ではなく、俳優、監督ほかスタッフ、映画会社の重役など、作り手側の人間である」ということ。そう、アカデミー賞は「同業者が同業者を^{ねざら}労う賞」なのです。これは大半の賞との最大の違いで、重要なポイントです。

ちなみに、私はノミネートされた作品を全部鑑賞して予想するわけではありません。ノミネート時点では日本で公開されていない作品も多いですし、公開されていたとしても、観られない場合もあるからです。

意外ですか？ 「観て、出来のいい作品を見極めるんじゃないの？」と思われるすよね。実は予想という意味において、特に作品賞や監督賞、主演男優賞といった主要賞は、場合によっては観ないほうが、的中率が高まるケースすらあるのです。

アカデミー賞にノミネートされる作品はたしかに超一流ですが、受賞する作品が必ずしも「その年で最も評価が高い作品」とは限りません。受賞作は、様々なロジックや法則に

したがって決まることが多く、それはしばしば作品評価の絶対的な高さとはズレてきます。ロジックという大げさですが、競馬の予想屋みたいなものです。馬の血統、特性、当日の毛並み、過去の全レースの結果、競馬場の特徴や天候、季節、ジョッキーとの相性、……それらを総合的に判断して勝ち馬を当てる。競馬と違い、アカデミー賞の大穴を当てたところで、なんの見返りもありませんが。

「観なくても当たる」は、センター試験の受験テクニックにも例えられます。現代文の文章読解問題では、難しい文章をちゃんと読まなくても、選択肢を吟味するだけで正解がわかる場合がありますよね。これと同じです。

現代文の問題では、文章の作家性や文学性に深く感じいってしまうと、逆に正解を見誤ります。同様に、アカデミー賞も、むしろ作品を観ないほうが自分の好き嫌いが排除され、冷静な予想ができる場合もあるのです。過去には、作品を事前に観てしまったばかりに、予想が大きく外れたこともありました。

たとえば第91回の作品賞は『グリーンブック』(18)ですが、授賞式直前に観た結果、いまいち作品が自分にハマらず、これを作品賞に選ぶことにどうしようもない抵抗を感じてしまいました。結果、本命で入りたい作品がなくなり、ものすごく気に入っていた『女王

陛下のお気に入りに』(18)と予想。もちろん、外しました。

『グリーンブック』の可能性はじゅうぶん認識していたものの、作品を観てしまった私の感情はいかんともしがたく。『女王陛下のお気に入りに』と予想したのは、私の「祈り」だったのかもしれない。

映画通じゃなくてもアカデミー賞は楽しい

本書は、アカデミー賞と共に生きてきた私が、アカデミー賞受賞予想の手順を具体的にお見せするとともに、私なりに思うアカデミー賞の魅力と楽しみ方を紹介する本です。

アカデミー賞は、100人いれば、100通りの楽しみ方があります。私自身、30年間アカデミー賞を見てきた中で、その楽しみ方は少しずつ変わってきました。見始めた頃は、ただただその煌びやかな世界と、贅沢な演出、見たことのない映像の数々に魅了されるばかりでした。そのうち、そこに登場する作品や俳優、監督のことをもっと知りたくなり、彼等の関連作品をたくさん見るうちに、いつの間にか映画自体の魅力に取りつかれるようになりました。

今の私の中では、それぞれの作品を楽しむこととアカデミー賞を楽しむことは別物で、

授賞式シーズンには、アカデミー賞という最高のショウを最大限楽しむために、ノミネートされそうな映画を観たり、情報を収集したりしています。

映画は大好きですが、アカデミー賞はもっと好き。

アカデミー賞の的中率を上げるべく情報収集に励めば励むほど、良作との出会いが増える。それは間違いありません。私自身、アカデミー賞に出会わなければ一生観なかったであろう作品に、たくさん出会えました。

映画に詳しくなくても、アカデミー賞はそれ単体で充分に楽しめる、極上のエンターテインメントです。この本を通して、アカデミー賞を高尚な趣味だと思っていた方々が、ちよつと覗いてみようと思うきっかけにしていただけなら嬉しいです。

目次

はじめに 3

オスカー予想屋、メラニーです 3

アカデミー賞は紅白歌合戦？ 5

なぜ予想できるのか？ 9

映画通じゃなくてもアカデミー賞は楽しい 12

第1章

意外と知らないアカデミー賞の基礎知識

23

アカデミー賞は誰が決めているのか？ 24

アカデミー協会が激増している理由 26

すべての映画がアカデミー賞の対象ではない 29

まるで選挙！ 配給会社同士のバトル 33

『選挙違反』してしまった『ハート・ロッカー』のプロデューサー 35

作品賞と監督賞の違いは？ 37

アカデミー賞対策で「助演」か「主演」かを決める!? 42

強引な「単独主演」扱いは、嫌い 45

知られざる仕事「編集」はめっちゃくちゃ重要 48

「編集賞」受賞は「作品賞」受賞の有力条件？ 50

すごい作品は賞の規定ごとと変える 51

長編アニメ映画賞の歴史は意外と浅い 52

国際長編映画賞は「国の代表」になるのが大変 54

アカデミー賞で日本の興収は上がる？ 58

本国公開と日本公開に時間差がある理由 60

コラム1 毎年恒例！ アカデミー賞発表日「メラニーの1日」 63

予想仲間、ローリー（仮名） 63

朝8時半に集合 64

過去の授賞式鑑賞会がスタート 66

第2章

オスカー予想、虎の巻 69

ノミネート数が少ないと作品賞を獲りにくい 70

作品賞を獲るには監督賞ノミネートがマスト!? 72

作品賞は「王道」が獲る 73

前哨戦のスタートはナショナル・ボード・オブ・レビューから 75

ゴールデングローブ賞は「2つの作品賞」に注目 77

「組合賞」は技術系部門予想の模範回答 79

影響力大! 映画俳優組合賞 82

全米脚本家組合賞の複雑ルール 83

英国アカデミー賞の影響 84

三大映画祭の注目作は国際長編映画賞の有力候補 87

オスカー狙いの映画は基本「秋以降」に公開される 88

「実在の人物」はオスカー受けする 90

実在の人物Ⅱ「オスカー狙ってます」感 92

受賞直前の悪い噂“バックラッシュ”の影響 93

「そろそろ獲らせてあげたい」のに、なかなか獲れない!? 96

「まだ早い」から獲れない、「人気者」だから獲れない 99

俳優賞にはしばしばアプセット（番狂わせ）がある 101

マイナー賞の当て方① 知名度の高い作品は有利 103

マイナー賞の当て方② 組合賞からのスライド系 105

超大作で“流せる”年は「当てやすい」 107

「当てにくい年」の予想はパズルのように埋めていく 109

授賞式ギリギリまでの情報戦 111

第3章

オスカー受賞、その鍵は「配給会社」

113

配給会社と製作会社、メジャースタジオと独立系 114

オスカー戦略はミラマックスが作った？ 116

1990～2000年代のオスカー御用達配給会社 118

親会社の意向でダメになってしまうジレンマ 121

現時点最強のオスカー配給会社、フォックス・サーチライト 123

メジャースタジオは有能なプロデューサーを囲い込む 124

栄枯盛衰！ 数年で変わる業界勢力図 127

Netflixについて思うこと 130

「配信作品は、オスカー対象になるべきか」議論 131

コラム2 第91回アカデミー賞「メラニーの予想ドキュメント」 135

作品賞は「捨てた」(笑) 135

第
4
章

アカデミー賞は社会情勢を映す鏡

145

全部獲ってる人は、オスカーも獲る 137

グレン・クロース、無念 138

サプライズなしの助演賞 140

スパイク・リーに獲らせたい！ 141

マイナー賞を拾う醍醐味 142

AMPSに吹いたダイバーシティの風 146

セクシュアルマイノリティを描くということ 148

「ゲイの俳優からゲイの役を奪うな」 150

ギャラ格差問題に切り込んだオスカー女優たち 152

交渉したらギャラが5倍に！ 154

ハリウッド発の「#MeToo」 156

絶対権力者ハーヴェイ・ワインスタイン 158

政治や世相を反映するオスカー 161

コラム3 第92回アカデミー賞授賞式目前！アカデミー会員試写に行ってきた 165

編集者・上綱麻子さん 165

オスカーファンにはたまらない試写室 167

夢のようなティーチイン 169

第5章 「超一流」が大集結！アカデミー賞授賞式は世界最高峰のエンターテインメントショー！ 171

「ドモアリガト、ミスター・ロボット」 172

アンナ・パキンとキャシー・ベイツ 174

記憶に残るNGスピーチ、ジュリエット・ビノシュ 175

オスカー史上最悪のハプニング、『ラ・ラ・ランド』幻の作品賞 178

ホスト史上のベストはビリー・クリスタル 181

90年代はアラン・メンケンの時代 184

特別な授賞式／第66回、第70回 187

一番好きな授賞式／第62回 192

巻末

アカデミー賞受賞一覧（第82回（2009年度）～第91回（2018年度）まで掲載）

197

主要参考文献一覧 208

あとがき 210

注

*文中、映画タイトル『』の後の（ ）は本国での製作年です。日本公開年と異なる場合があります。

*「第〓回」という記述はすべてアカデミー賞の開催回です

*アカデミー賞の年度表記は授賞式開催年の1年前です。

(例)『グリーンブック』は「2018年度(第91回)の作品賞」↓授賞式は2019年2月。

第

1

章

意外と知らない
アカデミー賞の

基礎知識

アカデミー賞は誰が決めているのか？

私は「はじめに」で、アカデミー賞は俳優、監督ほかスタッフ、配給会社など、作り手側の人間といった同業者が投票して決める、と説明しました。評論家や映画ファン（映画を観るプロ）が傑作を決める賞ではなく、世界中の映画産業に従事する人間が同業者を称^{たた}える賞。それがアカデミー賞です。

この同業者たちの団体、つまりアカデミー賞を選考するメンバーが、映画芸術科学アカデミー（Academy of Motion Picture Arts and Sciences / AMPAS）の会員、通称・アカデミー協会です。

では、どうやったらアカデミー協会員になれるのでしょうか？

その答えは、「二定以上の業績をあげた映画人ならば、AMPASの招待（後述）を受け入れることで、国籍に関係なく会員になれる」です。

会員の投票資格は2016年以降、10年の期限付きです。それ以前は終身制でした。とはいえAMPASが認めれば更新は可能で、3回更新したら終身投票権が与えられます。映画界で特に目立った活動をしていない場合、除名はされませんが、投票権を持たない名誉会員になります。

会員の職種は広く言えば全員「映画関連」ですが、職種は多岐にわたり、17の部門に分かれています。部門別で言うと「俳優部門」に属する俳優がもっとも多く、2割程度。他にプロデューサー、監督といったカテゴリーほか、美術スタッフや音楽家や編集や録音といった部門が存在します。

意外なのは、ここにPRなどを行うパブリシストも含まれているということ。パブリシストとは、各作品を宣伝したり、俳優や監督などノミネートされた人物の広報を担当したりする人を指します。直接的な作品製作に関わっていなくても、作品を世に出すことに関わる人であれば、アカデミー協会の資格があるわけです。

これらのどこにも属さない人は「members at large (無所属)」というカテゴリーに入ります。これは、現場で監督やプロデューサーなどはやっていないものの、「映画業界の中では重要な人」みたいなニュアンスと思われます。ここには、大手スタジオの重役や、世界各国の映画関係者で国際的に知られている人たちなど、映画業界に貢献している方々が名を連ねています。

アカデミー協会員が激増している理由

AMPA Sは毎年、世界の映画界で目覚ましい活動をした人に、新会員として加入を促す招待状を送っています。この「アカデミー協会員になりませんか？」という招待は、映画人としては最高の榮譽。既存会員2人以上からの推薦を受けた上で、協会の審査に通った人達に招待が送られます。

ただ、招待状を受け取った全員が会員になるわけではありません。様々な理由で拒否する人もいます。

ここで特筆すべきは、毎年の招待数の推移です。

私の記憶が正しければ、2000年代前半くらいまでの会員数は3000人から4000人くらいで推移していました。毎年それなりの数は招待されましたが、亡くなる方もいるので、大きな変動はなかったと思います。

ところが2010年代に入ると、招待数がものすごい勢いで増えていきます。

2013年に276人が招待された時、ある業界記事には「これによってアカデミー協会員数は6000人を超える」と書いてありました。そして2019年現在、アカデミー

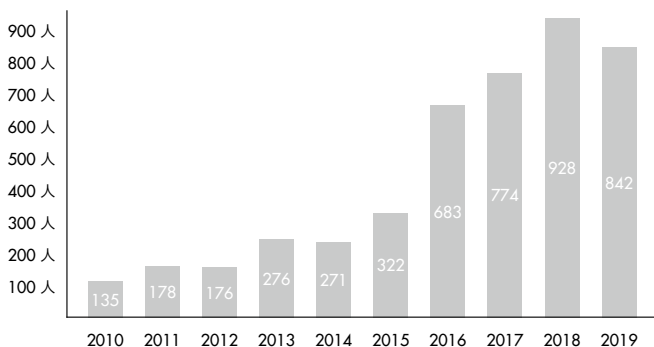
協会員は約9000人弱いるとされています。それが正しければ、この6年で会員数は1.5倍に膨れ上がったこととなります。

ちなみに2018年に招待された日本人は、新海誠監督、片渕須直監督、細田守監督、園子温監督、俳優の伊ッセー尾形さんなど。2019年は押井守監督、大友克洋監督、細田守作品のプロデューサー・齋藤優一郎さんなどが招待されました。

それにしても、なぜこんなに増やすのでしょうか。

実は2000年代前半くらいまでのアカデミー協会員は「白人男性」が大半を占めていました。非白人である黒人、ヒスパニック系、アジア系、そして女性は、映画界でどれだけ活躍していても、なかなか会員になることができなかったのです。

アカデミー協会員 招待者数



このようなAMPAASの体質は、10年代以降の世界的なダイバーシティ（多様性）のトレンドのなかで「時代遅れ」と批判を浴びるようになります。

極めつけは、2015年と16年に2年連続で俳優部門にノミネートされた俳優が白人だけだったこと。それをきっかけに、AMPAASは「白すぎるオスカー（#OscarsSoWhite）」と猛烈に批判されました。

そこで当時のAMPAAS会長シェリル・ブーン・アイザックス（黒人女性）は、2020年までに女性と非白人の会員数を倍増させると宣言しました。実際、2019年の招待者842人のうち、女性の割合は50パーセントで過去最多。有色人種の割合は29パーセント、出身国は59ヶ国にわたりました。

このような社会的潮流やアカデミー協会の人種構成変化、それらと密接に関連する「#MeToo」気運によってアカデミー賞の受賞傾向がどのように影響したかは、第4章で詳しく説明します。

当然ですが、メンバー数の増大とそれに伴う人種・性別内訳の多様化は、映画産業の発展においては100パーセント正しいことです。

が、予想屋の立場として考えると、ちよつと悩ましい部分があります。なぜなら昔は「白

人のおじいちゃんが好きそうな映画」を選んでおけば、大体間違いがなかったからです。加えてハリウッドにはユダヤ系の関係者が多数、という実態があるので、たとえば「ナチスドイツが舞台の第二次世界大戦もの」が強いことは、周知の事実でした（第66回の作品賞・監督賞である『シンドラーのリスト』はその最たる例）。

しかし今は、投票者の人種・性別の内訳がバランスよく均ならされているので、票割れしてしまつて予想の難易度が格段に上がりました。

また、時代の流れと共にナチスドイツは遠い過去の話になり、社会情勢も変化を続けているため、人々の関心事も多様化しています。15年前まで通用していた定説の一角が完全に崩れた形で、私としては手持ちの駒がひとつ減つたような感覚も否めません。

すべての映画がアカデミー賞の対象ではない

もうちょっと詳しく、アカデミー賞の仕組みについてお話ししましょう。

まず、アカデミー賞の対象となる作品の資格について。実は、世の中に存在するすべての映画作品がアカデミー賞の対象作というわけではありません。

長編映画の場合、対象となるのは「前年の1月1日から12月31日の間に公開が始まり、

ロサンゼルス郡内の商業映画館で、1週間以上連続して有料上映された、40分以上の35ミリか70ミリ、あるいは指定のデジタルフォーマットの作品」かつ、「劇場公開前にTV放送、ネット配信、DVD等が発売されているものは対象外」です。

このことは「定額制の有料動画配信サービスであるNetflixで放映されたオリジナル作品をどう扱うのか？」という議論にも関わってきます。第91回で監督賞を受賞した『ROMA／ローマ』(18)は、まさにこのNetflix配給作品。私自身の考えも合わせて後述しますので、今はちよつとだけ頭に置いておいてください。

長編アニメーションの場合、これに加えて「主要なキャラクターがアニメーションである」「上映時間の75パーセント以上がアニメである」ことも条件です。長編実写映画のなかにちよつとだけアニメのシーンが入っていても、それはアニメではないということですね。

次に、選考方法です。

アカデミー賞は、部門ごとにノミネート(候補)作品がまず決まり、それらを決選投票することによって受賞が決まります。たとえば、第91回の作品賞ノミネートは以下の8作品でした。

『グリーンブック』

『ブラックパンサー』

『ブラック・クランズマン』

『ボヘミアン・ラプソディ』

『女王陛下のお気に入り』

『ROMA／ローマ』

『アリー／スター誕生』

『バイス』

「どの作品をノミネート作品として選出するか」を決めるための投票をするのもアカデミー協会ですが、全会員が全部門のノミネート作を決めるわけではありません。

俳優部門の賞（主演男優賞、主演女優賞、助演男優賞、助演女優賞）は、俳優部門の会員（俳優）が投票します。同じように脚本賞は脚本家が、美術部門は美術スタッフと、それぞれの専門家が同業者の専門家に対して投票します。ただし作品賞だけは別。全協会員の投

票によってノミネート作を決定します。

また、国際長編映画賞（旧・外国語映画賞）や長編ドキュメンタリー映画賞、歌曲賞などの場合、ノミネート作に選ばれる前段階として「ショートリスト」と呼ばれるリストに入る必要があります。多くの作品の中から一度少数に絞るプレ選考のようなものです。

しかし、なぜ全協会員が全部門のノミネートに投票しないのでしょうか？ それはやはり、その道のプロの目で見ないと、その映画の特定の部分が「どう優れているか」がわからないことが多々あるからでしょう。

同じ俳優であればこそ、「この芝居の難易度がいかに高いか」がわかるものですし、同じ美術スタッフであればこそ「このセットを組むのはものすごく手がかかる」と気づく。脚本家が「あの長くて複雑な原作を、よく2時間にまとめた！」と褒め称^{たた}える。各分野の粒ぞろいが選^えび抜かれるというわけです。

そうして選ばれたノミネート作に対して、最終選考では全協会員が全部門に投票して受賞作を決めます。当然、無記名投票です。

なお、集計を仕切っているのはAMPASではなく、大手会計事務所のプライスウォーターハウスクーパース（PwC）です。公平を期すため外部に委託しています。受賞発表のそ

の瞬間まで、受賞結果を知っているのはPWCの担当たった2人だけです。

まるで選挙！ 配給会社同士のバトル

例年、ノミネート作品の発表は1月20日前後で、約1ヶ月後に授賞式が行われます。この本を書いている時点では、来たる第92回のノミネート発表は、少し早めの2020年1月13日(月)、授賞式は2月9日(日)(アメリカ現地時間)です。

この1ヶ月間は、言わば選挙キャンペーンみたいなもので、ノミネート作品の配給会社^{*1}が、映画関係者が読む業界誌^{*2}に広告をバンバン打ちます。「FOR YOUR CONSIDERATION (検討ください)」[Best Actor: Tom Cruise! (主演男優賞はトム・クルーズで決まり!)]¹といった具合いです。

また、作品を観られていない協会員に本編が収録されたDVD(通称「スクリーナー/Screener」)。かつてはVHS、現在はストリーミング再生できるリンクも併用される)を送るの

*1 完成した映画を劇場でかけるために劇場と契約したり、宣伝したりする会社。映画を製作する会社(製作会社)や劇場を運営する会社(興行会社)とは機能が異なるが、製作と配給を両方行う会社もある。

*2 代表的なものに「Variety」「The Hollywood Reporter」がある。

も、この時期の配給会社の大事な仕事です。

これらはあくまで「業界内」でのアピール活動なので、一般の人たちが目にすることはほとんどありません。にもかかわらず、彼らはものすごくお金をかけて、ノミネート期間中に宣伝活動にいそしみます。

作品さえ良ければ、あとは映画に通じたアカデミー協会員たちの判断に任せればいいのでは？ という疑問を抱かれるかもしれませんね。でも、それでは現実問題としてオスカーを獲得することができません。なぜなら、人々は観ていない作品には投票をしないからです。

すなわち、ノミネートされた作品にとって最も重要なのは、その作品を見て貰うことです。映画に詳しいアカデミー協会員も、やっぱり普通の人間です。個人的に注目している作品以外は、必ずしもすべての映画に興味を持っていないでしょう。そんな中、露出が多くタイトルを頻繁に目にする作品や、皆が話題にしている作品は、「なんだか盛り上がっているな」と意識に刷り込まれ、優先して観に行く気になります。その点は、普通の人が映画を観に行く動機と、なんら変わりはありません。

映画の公開本数とはにかく多いので、アカデミー協会員がノミネートされた作品を事前

にすべて観ているとは限らないなか、配給会社は作品を観て貰うために、広告を景気よく打ち、スクリーナーを大量に送付するのです。

『選挙違反』してしまった『ハート・ロッカー』のプロデューサー

ところで、アカデミー賞の規約上、スクリーナーを撒くことは禁止されていませんが、そこに同封を許される情報については、「作品名と、FOR YOUR CONSIDERATIONの言葉はOK」「作品の画像や映評、受賞歴はNG」など、厳しい規定があります。また、協会員に対して個別にメールなどで「この作品に投票してください」と依頼したり、対抗作品に対する批判を送ることは厳しく禁じられています。

ところが、第82回にそれをやってしまった人がいました。2004年のイラク戦争における爆弾処理班班長の死闘を描いた『ハート・ロッカー』(09)のプロデューサーのひとりです。彼は同年に各賞の受賞を有力視されていた超大作『アバター』(09)を意識し、「大作はお金があるからいくらでも広告が打てるけど、我々はそれができない。派手なだけでなく、本質的に意義のある作品を選んでください」という趣旨のメールを関係者に送ったことが明るみに出て、授賞式への出席が取り消されました。

たしかに、『アバター』は2億ドル以上かけて製作され、配給会社はメジャースタジオ（後述）と呼ばれる超大手にして老舗、20世紀フォックスですから、賞レースにかけるとは予算も潤沢だったでしょう。

対する『ハート・ロッカー』は製作も配給も独立系の会社で、『アバター』ほどの宣伝予算がなかったことは、容易に想像できます。

このように、オスカーキャンペーンについては許される活動範囲、禁止行為などが細かく規定されており、毎年公式ホームページで公開されているのですが、このプロデューサーはそれを知らなかったのかも知れません。ほかに、候補作品の関係者や配給会社には「協会員に贈答品を送ってはいけない」「協会員をノミネート作品のパーティに招いてはいけない」など、細かい決まりごとが沢山あり、各社各個人はそこに引かからないすれすれのラインで、自分たちの作品をいかに宣伝して見て貰うか、キャンペーンに力を注ぐのです。

結局、そんな騒動がありつつも、『ハート・ロッカー』はアカデミー賞で『アバター』を圧倒し、作品賞、監督賞、脚本賞、編集賞、音響効果賞、録音賞の6部門で受賞しました。件のプロデューサーも、授賞式には出席できなかったものの、後日別途オスカーを受け取

ったとのことでした。

ところで、作品アピールのためにスクリーナーを撒くという習慣は、昔のアカデミー賞にはありませんでした。ホームビデオの存在しない時代にできたことは、せいぜい関係者向けの試写会を開くだけ。

スクリーナー配布のルーティン化を最初にはじめたのは、ミラマックスという映画会社のハーヴェイ・ワインスタインだと聞いています。彼のアイデアによって、ミラマックスは一時期アカデミー賞を獲りまくるスタジオとして名を馳せるのですが、その話はまた改めて。

作品賞と監督賞の違いは？

2019年現在、アカデミー賞は全24部門あります。

作品賞 (Best Picture)

監督賞 (Best Director)

主演男優賞 (Best Actor)

- 主演女優賞 (Best Actress)
- 助演男優賞 (Best Supporting Actor)
- 助演女優賞 (Best Supporting Actress)
- 脚本賞 (Best Original Screenplay)
- 脚色賞 (Best Adapted Screenplay)
- 長編アニメ映画賞 (Best Animated Feature)
- 国際長編映画賞 (* 注) (Best International Feature Film)
- 長編ドキュメンタリー映画賞 (Best Documentary Feature)
- 短編ドキュメンタリー映画賞 (Best Documentary Short Film)
- 短編実写映画賞 (Best Live Action Short Film)
- 短編アニメ映画賞 (Best Animated Short Film)
- 作曲賞 (Best Original Score)
- 歌曲賞 (Best Original Song)
- 音響編集賞 (Best Sound Editing)
- 録音賞 (Best Sound Mixing)

美術賞 (Best Production Design)

撮影賞 (Best Cinematography)

メイクアップ & ヘアスタイリング賞 (Best Makeup and Hairstyling)

衣裳デザイン賞 (Best Costume Design)

編集賞 (Best Film Editing)

視覚効果賞 (Visual Effects)

*注 第91回までは「外国語映画賞」と呼ばれていた

作品賞と監督賞の違いはわかりにくいですね。一応、作品賞の受賞者はプロデューサー^{*3}、監督賞の受賞者は監督となります。とは言え、作品とは基本的に監督が作り出すものなので、作品賞と監督賞が違う作品に与えられると、私自身はちょっと違和感を覚えたりもします。

*3 企画立案、製作資金調達、スタッフ集め、制作スケジュールの管理、予算の管理など、作品全体を統括し、作品の方向性を決定する仕事。制作現場の統括やクリエイティブを担うのは基本的に監督の領分だが、クリエイティブに口を出すプロデューサーもいる。

ただ、「作品賞にはノミネートされているけど、監督賞にはノミネートされていない」作品に注目すると、おぼろげながら作品賞と監督賞を分ける意味が見えてきます。

素晴らしい映画というのは、単に「監督の采配さいはいがうまかった」というだけではありません。素晴らしさの中にもいろいろな要素があつて、この俳優のこの個性がなかったら映画はここまで良くなかつただろう、というようなこともあります。それは音楽かもしれないし、撮影かもしれないし、脚本かもしれない。映画とは共同作業。決して監督ひとりで作るものではないのです。

もし「監督の采配」よりも、これらの諸要素のほうが秀逸で、それらを総合した結果、作品として素晴らしい——のだとしたら、それは作品賞候補ではあつても、監督賞候補ではない、ということになるのでしょう。少なくともこれが私の理解で、前述の違和感を納得させるようにしています。

作品の成り立ちがヒントになることもあります。

たとえば、「映画化したら面白いと思うこの小説、監督は○○で、脚本家は△△、主演女優は□□で作ったら絶対に名作になる」とプロデューサーが考えて映画化を実現させた場

合、そのプロデューサーこそが作品の生みの親、との位置づけになり、作品賞Ⅱプロデューサーの功績、という図式が自然なものと感じられます。

一方で、監督のなかに「こういう作品を、こういう俳優で作りたい」という意志が明確にあり、スタジオやプロデューサーに持ち込んで作品が作られる場合、そちらは発案者も采配を振るうのも監督になるので、作品賞Ⅱ監督のもの、という印象になりますが、こういった場合は監督自身もプロデューサーとして名を連ねることが多く、その監督は両方の役割で受賞をすることになったりします。

余談ですが、監督のなかには「自分の作りたいものしか作らない」「自分発信のものしか興味がない」という人も結構います。クリストファー・ノーラン(『ダークナイト』『インセプション』『インターステラー』『ダンケルク』)や、ポール・トーマス・アンダーソン(『マグノリア』『ザ・マスター』『ファントム・スレッド』)などがその代表格です。彼らの企画は公開直前まで、ほとんど内容が明らかにならない上に、実際の作品もオリジナリティ溢れるストーリー展開になっていることが多いので、彼等の作品は「作品Ⅱ監督のもの」を地で行く典型だな、といつも思います。

アカデミー賞対策で「助演」か「主演」かを決める!?

俳優まわりの4賞（主演男優賞、主演女優賞、助演男優賞、助演女優賞）は読んで字のごとくですが、誰が主演で誰が助演かが、明確な映画と明確でない映画があります。

たとえば第91回でオリヴィア・コールマンが主演女優賞を獲った『女王陛下のお気に入り』は、完全に3人の女優——オリヴィア・コールマン、エマ・ストーン、レイチェル・ワイズ——が主演の映画です。とりわけオリヴィア・コールマンだけが突出しているわけではありません。にもかかわらず、エマ・ストーンとレイチェル・ワイズは、助演女優賞にノミネートされました（受賞はならず）。

ではなぜ、オリヴィア・コールマンが主演女優賞にノミネートされたのか。それは、彼女がもつとも主演女優賞を獲れそうだと、製作側が判断したからです。

作品を製作している時、おそらくは明確に「オリヴィア・コールマンが主演、エマ・ストーンとレイチェル・ワイズが助演」ではなかったはずです。作中の存在感や女優の格からしても、それは明らかでしょう。

でも、アカデミー賞レースに乗った時点で製作側は判断しました。「オリヴィア・コールマンを主演として、ほかのふたりを助演として推した方が、3人が共にノミネートされる

可能性が高くなる」と。

つまり、自社作品の誰をどの部門のノミネート候補としてプッシュするかは、製作者や配給会社が戦略として任意に決めるのです。ただし、最終的にどの部門で投票するかを決めるのは、アカデミー会員です。

それで変なことが起こったのが、第81回です。

第81回はケイト・ウィンスレットが『愛を読むひと』(08)で主演女優賞を獲っていますが、ケイトはアカデミー賞の前哨戦であるその年のゴールデングローブ賞(第66回)では、同じ『愛を読むひと』で助演女優賞を受賞しています。つまり、ゴールデングローブ賞の時点では「助演扱い」だったわけです。

しかし、『愛を読むひと』を製作したウィンスタイン・カンパニー(先述したミラマックスのハーヴェイ・ワインスタインが作った会社)は、ケイトを主演推ししてアカデミー賞を獲りにいき、見事に獲りました。

なぜ獲れると思ったのでしょうか。これは推測ですが、第81回アカデミー賞で主演女優賞にノミネートされる(と予想される)女優が、この作品でのケイトに比べて「弱かった」からでしょう。

第81回の主演女優賞で実際にノミネートされたケイト以外の女優は、アン・ハサウェイ（『レイチェルの結婚』）、アンジェリーナ・ジョリー（『チェンジリング』）、メリッサ・レオ（『フローズン・リバー』）、メルル・ストリープ（『ダウト』）あるカトリック学校でゝでした。強い、弱いはざっくり言う、その役者の力量＋作品自体の評価に比例します。この年の対抗馬は、演技はともかくそれぞれの作品があまり強くありませんでした。

実はケイトは、同年『レボリューショナリー・ロード／燃え尽きるまで』（08／配給はパラマウント）にも出演しており、こちらは第66回ゴールデングローブ賞で主演女優賞を受賞しています。しかし同作はゴールデングローブ以外の賞レースでは頭角を現さず、「アカデミー賞も難しい」と囁かれていました。

もし、パラマウントの『レボリューショナリー・ロード／燃え尽きるまで』がゴールデングローブ賞以外の前哨戦で順調に受賞を重ねていて、ケイトの主演女優賞も含めたアカデミー賞での複数ノミネートが見込めそうな空気だったら、ワインスタイン・カンパニーはおそらくケイトを助演でエントリし、主演とのバッティングを避けたはずです。

しかし『レボリューショナリー・ロード／燃え尽きるまで』はアカデミー賞におそらく絡まない、そして他作品で主演女優賞にノミネートされそうな女優は軒並み弱い。さらに

『愛を読むひと』はナチスがテーマなので、アカデミー賞的には鉄板の題材。

結果、ケイトは主演部門にノミネートされ、見事に受賞しました。ワインスタイン・カンパニーの戦略勝ちです。

強引な「単独主演」扱いは、嫌い

昨今のアカデミー賞では、配給会社が俳優をどの部門でプッシュするのかの決断がものすごく大きな意味を持ちます。なぜなら、大方の協会員は、それに従って投票をするからです。

しかしそのせいで、事実上3人が主演のはずの『女王陛下のお気に入り』は、オリヴィア・コールマンが強引に「単独主演」扱いとなってしまうました。個人的な気持ちを言う、私はこのトレンドが嫌いです。

たとえば第75回、ミラマックス製作の『ギャング・オブ・ニューヨーク』(02)でダニエル・デイ＝ルイスのあまりにもすごい演技を見たハーヴェイ・ワインスタインは、「これは主演男優賞を狙える」と考え、どう考えても助演のダニエルを主演男優としてプッシュ。結果、ダニエルは主演男優賞にノミネートされます。しかしそのせいで、本来の主演男優

であつたレオナルド・ディカプリオはまったく蚊帳の外に置かれてしまいました。

結局、主演男優賞は『戦場のピアニスト』(02)のエイドリアン・ブロディが獲りました。これは完全に番狂わせ、サプライズウィナーでした。あれはきつと、『ギャング・オブ・ニューヨーク』の主演選定がおかしい、と思つた投票者の票が、若きエイドリアンに流れたからなのではないかと、私はいまだに思っています。

かつてのアカデミー賞に、そのような混同は見られませんでした。第57回では、名作『アマデウス』(84)でサリエリ役のF・マリー・エイブラハムとモーツアルト役のトム・ハルスがダブルで主演男優賞にノミネートされ、エイブラハムが見事受賞。エイブラハムは受賞スピーチで、「今ここにたった一つだけ欠けているものがあるとすれば、トム・ハルスと一緒に横にいないことだ」と言い、大きな拍手が送られました。自分の受賞は彼なくては不可能だった、というわけです。

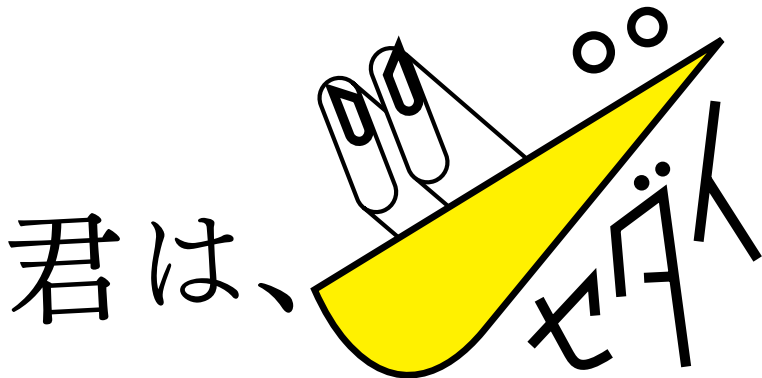
第64回、『テルマ&ルイーズ』(91)のジーナ・デイヴィスとスーザン・サランドンもそうです。二人とも主演女優としてエントリーされ、ダブルでノミネートされました。映画を観ればわかりますが、どちらかが助演になるなんてことは考えられません。ダブル主演の映画はよくありますから、その場合は二人とも主演として扱われないとフェアじゃない。

私はそう思います。

なんてことを書いていたら、いいニュースが入ってきました。ダブル主演でどちらが助演に回るかと噂されていた『フォードvsフェラーリ』(19)のクリスチャン・ベールとマット・デイモンが、二人そろって主演でオスカーレースに参戦することが決まったのです。第92回のノミネート、どうなることか。

実は2019年はダブル主演の作品が多く、この原稿を書いている2019年10月現在、『ザ・ライトハウス』(19)はロバート・パティンソンを主演、ウィレム・デフォーを助演として推すことが発表されましたし、『ふたりのローマ教皇』のアンソニー・ホプキンスも助演に回ると言われています。

そんな中、二人とも主演と決定した『フォードvsフェラーリ』には心から拍手を送りたい。第92回は主演男優賞も助演男優賞もものすごく混みあっていると言われている中、どちらにしてもノミネートは容易ではありませんが、主演での久々のダブルノミネー、見たいです。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!